

いのちのとき

伊藤 雅子 (南山短期大学教授)

I. はじめに

人は生きている限りいのちと関わっている。しかし、日常生活において、その関わりを意識することは殆どない。親しい者の死に直面したとき、あるいは自分の限りある生涯におもいをはせるときなどに、私たちは漠然といのちを自分の思考の片隅に置く。そして多くの場合、私たちはいのちを生きている時間という範疇の中で考えることが多い。

他方、ここ数年、環境・人口・女性などの問題を論じる中で、これまでとは異なる切り口・視点で人間・社会・世界などが見直されるようになってきた。そのことと関連して、これまでの価値観の根元を形成していた基準が大きくゆらぎ、新たな基準の導入が提唱されたり、また、より適切な基準が模索されたりしている。そういった基準の一つに「時間」があげられるが、この小論では、人間社会の問題究明の新たな切り口としても注目されつつある「時間」に目をむけ、若干の時間をめぐる考え方を検討し、それらと交錯しながら、ともしれば日常生活の背後に埋もれがちないまひとつの時間、「いのちのとき」に言及してみたい。

II. 「時間」をめぐって

1. 人間の発達過程と「時間」

混沌の中に生まれ、昼夜の区別なく生きる赤ん坊はどのようにして時間の節目を意識し、学習していくのであろうか。それはおそらく柏木恵子氏の指摘するように自己の「行動制御機能として抑制の構造の発達」(柏木、p.71)とし

てとらえられ、自分の外にあるさまざまな動きをいち早く認知し、分析し、適切に反応できるようになることを意味している。多くの場合、無為に時間をとることは、未熟とか無能が原因であると考えられることが多い。したがって、「時間」の短縮という変化の方向は、子どもの発達過程の一つの重要な変化としてとらえられている。

しかし、ただ時間をとられない、短縮する、反応が早く起こることだけが有能であること、発達することではない。歩行の発達を考えてみても、反応を早く始発し活動をすすめてゆくだけでなく、逆に運動であれ認知的反応であれ、その質を高めるような意味のあることに時間をとる、時間をおく、待つことができるといった変化が、行動を目的適応的なものにする。それは自由に動くようになった運動的、認知的機能を活動させること以上に、難しいことである。自然の勢いに任せて活動することを阻む「自己」の働きが関与するようになり、この規制するという変化は行動発達の重要な面 — 自己行動制御機能 — の発達にほかならない。

さらに、待つことができる＝欲求、衝動としてはすぐにも起こる傾向にある反応をさしひかえていられることが、年少の子どもには非常に難しい。「待つ」ことの発達は漸進的なものであり、社会的場面でのさまざまな「待てる」ことの発達も重要である。幼少の頃は待つべき時間の長さ「待つ」ことの可否は大きく規定され、このようにして「待つ」ことに要する自己抑制の機能の発達が可能になる。

赤ん坊はこのように母親によって条件付けられていくが、食べることや寝ることにはじまり、子どもは自分の周囲の社会の習慣を学習するが、このことは、社会学では社会化とよび、時間の観念も社会化の重要な項目の一つである。生まれた赤ん坊は自分の周囲の世界を自分の中に同化しながら性格を形成していくが、「時間はその同化のプロセスで一番無意識の内に同化され、その同化がその人の中に深く入り込みすぎる可能性が大きい（小林、p.47）」と言われている。

2. 現代社会と「時間」

成熟した性格の人では、未成熟な人よりも、方向決定、指向性がはっきりしており、外に向かって能動的に焦点を合わせているように見える。では、成熟した人が焦点を合わせようとしている「外」とか、社会における「時間」とは如何なるものであろうか。

われわれは漠然とではあるが、自分の生涯という時間感覚があり、その生涯というイメージが自分の今の選択を構成し、未来に向うわれわれの生活設計は、われわれの過去についての意識を構造化する。また、過去と未来が、現在という時間における自分の意識の中にあり、それはアイデンティティとも深く結びついている。アイデンティティには、自分の生涯という時間感覚が重要な要素

となっている。そして、自分の人生を自分の手の及ばない運命のようなものによって翻弄されるものでなく、自分自身が決定するものなのだと思うことができ、このことは今日の社会を生きる人間には自立的な生き方として高く評価されるものとなっている。しかし、この自立的な生き方は自分の生涯の設計を自分でできるという感覚に受けとられ、それは「近代人のもつ幻想（江原、P.34）」かも知れない。近代社会において、産業化と技術の進歩は、自然の脅威から日常生活をほぼ解放した。「近代化に伴う業績主義・普遍主義的組織原理の一般化は、われわれの社会生活を運命共同体としての個別の集団から引き離し、相対的な自立の感覚を与えた。われわれは自分が何かの目標を立て、その目標に従って努力すれば、その目標の達成が十分実現可能であるかのように思えるよう（江原p.34）」になってきており、そのような生活を当たり前と享受している。

近代科学の生み出した成果を享受しながら、現代人は時間だけでなく、その他のいろいろな幻想の中に生きているが、それがたとえ幻想であったとしても、近代社会の教養人は与えられた、または、自らが選択した目標に向かって合理的に努力することが一つの重要な資質とみなされている。知的な生き方を主題とする名著も幾つか出版され、「時間」というテーマは必ずといって良いほどそれらの著作に取り上げられている。この種の著作としては古典に属する「知的生活」（P.G.Hamaton; The Intellectual Life）のなかで、ハマトンは時間を節約する一番いい方法は、「なにかを学んだり行ったりする時には、必ず、完全なものにするのだという強い気概をもって臨むことです。そして、一方、どうにもならない限界がみえた時にはいさぎよくそれを認めてしまうことです」（ハマトン p.185）といている。「完全なものにする」、「気概をもつ」といった言葉が近代社会的な響きをわれわれに印象づける。そして「ものの道理がわかる歳になってからの研究では、若い頃のあやまちを繰り返さないようにしようではありませんか。今後も研究を続ける学問においては、完全な、すなわち、正確に体系立った知識を身につけるよう、しっかり心掛けようではありませんか」（ハマトン、p.186）と言う部分では、努力しようとする真摯な姿勢を感じながらも、より流動的な今日の知識・情報の現状との間に距離を感じざるを得ない。

時間の使い方について、野口悠紀雄氏は最近のベストセラー「続『超』整理法・時間編」のなかで、時間を目に見える形にして管理することを基本にしながら系統的にいくつかの実際的ヒントを述べ「ノウハウを論じた実用書」（p.271）であるとしながらも最後の章で、他人の時間を大切にすることを強調され、今日の社会のルールに言及されていることには好感を禁じえない。また、時間についての興味ある囲み記事、精選された参考文献、整備された索引などが、新書版の本でありながら、この著作を現代社会にマッチした時間についてのすぐれた入門書としているように思われる。

3. 『時間泥棒』

時間を自分のコントロール下におき、自分のものにしておこうという考え方が進むと、「時間泥棒」がその時間を盗ることになる。東京大学出版会より矢野真和編著の「生活時間の社会学、社会の時間・個人の時間」の刊行案内にも「仕事、食事、家事、睡眠、育児、余暇、テレビ、スポーツなどの時間の使い方は、生活の日常性を測定する総合的なものさしである。社会の時間と個人の時間を切り口にして、豊かな時代の生活像を独自の調査と理論考察を織り込んで展開する“時間泥棒に盗まれた時間を取り戻したい”現代人のためのサイエンス」と記されている。また、新聞の新刊紹介欄にJ. P. ホーガンの「時間泥棒」というSF文庫の本が「街角のそここで時間の流れが狂う？ニューヨークだけを襲った異変の謎」と紹介されている。

「時間泥棒」はかの有名なミヒャエル・エンデの『モモ』の中の「灰色の男たち」を通して巧みに取り上げられている。エンデは「時間は本当の持ち主から切り離されると文字通り死んでしまうのだ。人間というのは一人ひとり自分の時間をそれぞれ持っている。この時間は本当に自分の時間である間だけ生きた時間でいられるのだ」といっている。われわれが時間をうまく使おう、節約しようだけを考えている間に、いつしか時間の主人から時間の奴隷になってしまい、知らず知らずの間に時間泥棒の手先におどらされていることを、エンデはこの物語を通して伝えようとしている。

4. 新しい切り口としての時間

この「時間泥棒」という考えかたは、その裏に「時は金なり」という時間と経済的価値がいつもセットになっていることを示唆しているが、異なった立場からあえて「金にならない時間」に焦点をあてたのがイリイチであろう。これまで生活水準の国際比較・文化間比較はそれぞれの人が獲得する賃金という貨幣的価値でなされていたが、人々の生活を支えているものが賃金化された労働だけでなく、賃金化されない労働（Unpaid Labor）にも依存していることに目が向けられるようになり、最近では金銭的報酬の有無にかかわらず労働時間・生活時間の比較が生活水準の比較に用いられるようになってきた。しかし、金銭に換算しない時間だけを比較するとなると「どのように」ということが、まだまだ論じられなければならない。イリイチは影の労働“シャドウ・ワーク”という概念を導入し、家事・子育て通勤など賃金を支払われない部分の労働を、その中にいれている。

Ⅲ. いのちのとき

—体験を語る—

1. 時差 時差のない中国

地球上を旅行すると自分の時計を時差に対応して調節することになる。短時間に地球の反対側へ行く場合などかなり無理を感じながら現地時間に自分の身体的機能を適応しようと努力する。地図上の経線の15度が1時間と計算し、自分の時計を進めたり遅らせたりするのは旅慣れた人にもかなりやっかいな仕事である。しかし、時差はあっても「時間」は万国共通のものであり、「定刻を守る」ことに関して、のさまざまな社会の習慣があるが、(野口氏は彼の著書の囲み記事(p.251)で、いくつかの興味ある事例を紹介している。)時差に関して、中国は例外のようである。

昨年、中華人民共和国を旅行したとき、「中国内に時差はない」と聞いて驚いたことがある。そして、蒙古奥地で北京時間に合わせ、真夜中に起床を強いられる奇妙な生活を思い描いたが、広大な原野で太陽の動きや星の移り変わりといった自然現象に合わせた生活で時計など必要でないと気づいたときには、目が見開かされるように感じた。

太陽の動きの併せて時間をきめ、さらにその時間を時・分・秒と細かく区切って、その時間の範疇の中で物事の順序をきめたり、生活の秩序を組み立てることによってしか安心して生きられない今日のわれわれの社会では、時計のきざみを無視した生活を憧れこそすれ、実際には不可能と決め込んでいるのではないだろうか。

2. 「時間」のない「とき」の体験

娘が出産して、わが家で産後の約1か月を過ごした。自分では家庭外の仕事を持ちながら4人の子どもを何とか育てたこともあって、その娘親子との生活に何の不安も抱いていなかった。むしろ、しばらく別々に暮らしていた娘との語らいを楽しみにしていたと言った方が正しいかも知れない。

娘は周囲のあふれるような情報(この多さにも私は驚いたのであるが)を敏感に感じとりながら、不安一杯の“新米ママ”で、赤ん坊の世話をひとつひとつ試行錯誤しながら学習していった。私自身はどちらかというと新生児の入浴の世話以外は出来るだけ母親である娘を見守り、わからないことがあれば私なりの意見を娘に伝えるようにしていたと思う。娘親子がわが家に滞在した期間の殆ど毎日、私は自分の仕事に出かけ、早めに帰宅して孫に入浴をさせることを日課としたが、そう言った生活の中で、私はそれまでには経験しなかったある種の「しんどさ」を体験した。入浴させることが肉体的に負担になったのではない。事実、浴室に給湯設備があるのが当たり前となった最近の家庭での新生

児の入浴介助は、台所の釜でお湯をわかし、それをバケツで新生児入浴用たらいまで運んだかっての時代とは比較にならない楽な作業であった。

私の経験した「しんどさ」は、むしろ精神的なもので赤ん坊の時間的ペースに自分の日常的時間の感覚を適応させることに対する「しんどさ」だった。入浴させようと思っても赤ん坊が静かに眠っていたりすると、その安らかな寝顔をながめながら待つ。授乳の時間がずれると、それに合わせて入浴時間も変えざるをえない。赤ん坊に必要とされる時の間にはさまれる待つ時間を、私は最初、細々した仕事で埋めようとし、また、待つ時間もここでは次の食事作りの手順や仕上げなければならぬ文書のことに向かっていることがしばしばあった。そして、赤ん坊のいのちのリズムを感じながらも、それに合わせて自分もそのリズムの中に身を置くことが、日常の生活とは異なる集中力を必要としていた。しかし、しばらくすると、うまく説明できないが赤ん坊のいのちのリズムにあわせた自分のいのちのリズムを、からだ全体の深いところで感じ始めている言い知れぬよろこびを自分の中に感じ始めていた。

私たちの日常生活は多くの場合、分きざみとまでいかなくても、始業、終業、打ち合せ、会議、仕事のための最低の準備、約束、等々で区切られており、それらの区切りをひとつひとつこなしていくことで、成り立っている。それに対し、母親の胎内から出生したばかり新生児は自分の小さないのちの要求のおもむくままに生きており、そのときの流れには一定のリズムはあるが、そのリズムは、私たち大人の区切られた時間とは全く異質のものようである。私が体験した「しんどさ」は、赤ん坊を取り巻くその異質であるいのちのときの流れのリズムの中に入りたり出たりするときに感じられたと言えよう。私は赤ん坊が「いのちのとき」を生きており、私は「時間」を生きていることを認めざるをえなかった。

日常生活のさまざまなことを支障なくこなしていくための区切られた「時間」は私にとっては貴重である。その区切られた時間の中で、私は自分の義務を果たし、人と関わり、緊張し、くつろぎ、節目を乗り越えて、それなりに生きていたと思っていたが、赤ん坊の生きている「いのちのとき」の流れを身近に感じたとき、その異質なときの流れの中に、何か自分が知らず知らず失っていたものを確かに垣間みた思いがした。それは自分に与えられていると思っている24時間を自立的な生き方として自分が評価し、自分のアイデンティティの基礎とするために、26時間、いや30時間の価値をもたせようとあくせくしている生き方とははるかに異なる質のものである。

区切られた時間を日常のものとして生活し、それを生活の第1義的なルールとしている私たちにとって、それから解放されることは一種の贅沢かもしてない。1996年1月、読売新聞が時間に追われる日常の生活を反省しようと、「時計をはずして」のテーマで投稿を募集したところ、日の光、街の音、眠気や腹時計など数字の表わせない「時」も、生活の中には流れていると言う反応

とともに、子育てがきっかけという人が複数あったようだ。例えば次のような一節がある。

「育児に既成の時計は必要ない。子供の目覚めとともに起床し、子供の腹時計に合わせて食事、とまるで原始時代のようなのだが、マイペースで実に快適、独身時代は夜も腕時計をはめたまま寝ていた。時計のない生活を送って、本当はとてもぜいたくなのでは」ないか。(埼玉県川口市の須藤幸子さん(36))

明確な裏付けはないが、私は女性として生きる意味は「いのちに対する第六感」を持っていることを意識するときに深められるとずっと思ってきた。ここで述べられた贅沢な「いのちのとき」を感じることも、この「いのちに対する第六感」に帰せられるものかもしれない。さらに、この「第六感」は女性の包み込む力にもつながるようにも思える。女性は男性よりも生涯設計などにおいて自ら環境に挑戦しそれを自分の意思に従わせようとするよりも、「自分の人生が出産というできごとで全く変わってしまうという予期をもつ」ことと、これまで「業績主義・普遍主義などの制度的原理から切り離された」「私的領域・個人生活の領域」に責任をもたされてきていたため(江原他p.34)。受容的・依存的にならざるを得なかったことにも依るのであろう。私はこれまで女性が人生設計を描くに当って明確に自己の生き方を主張しにくいことを女性の依存的傾向とみなしていたが、そのことは女性の「いのちに対する第六感」を基盤とする包容力としてみることも可能であろう。「いのちに対する第六感」については、また別の機会に考察してみたいと思っている。

3. 老親との時間

最近、末期癌におかされている老いた母を10日に1度くらいの間隔で見舞っている。もっと頻繁に見舞わなければと思いつつ、自分や家族の生活もあり、往復6時間の道のりを考えるとそうもいかない歯がゆさがある。数年前から同じことを何度も繰り返す老人特有の症状があったとはいえ、90才に近い年齢の割には達者な母であったが、このところめっきり弱ってきた。病院のベッドのそばで、母と共に過した日々ことや家族の話をして、母は努力して聞いているようではあるが、話がかみ合っていない。私のスーツにつけた花のブローチに伸びるやせた母の手をとって「おかあさまのお好きな花ね。でも、おかあさまの手、冷たいわ」といいながら、母の気持ちに集中しなければと思いつ手を握りしめる。こういうことは、きっと私と同じ立場にある人ならばおそらくそうするだろうことに過ぎないのかもしれない。しかし、日常生活とは違ったときの流れの中で、過ぎ去った過去と限りある未来の狭間で「今」を懸命に生きようとしている老親の「いのちのとき」を、私は母を見舞う度に感じている。老いで感じられるこの「いのちのとき」はキリスト教でいわれる「永遠の生命」へとつながるものとも言えるであろう。私は半年ほど前に、生まれたばかりの

赤ん坊との生活で体験した「いのちのとき」への集中力と重なるエネルギーを自分の中に感じながら、老いた母の現世では残り少い「いのち」を精一杯感じようとしていた。

生まれたばかりの赤ん坊は、まだ時間というものを知らないので、本能のおもむくままにしか生きられないのだろうか？老境に身をゆだねる人は、その人が若い日々で体験したような歯切れのよい生活をする気力を失ったから、無意に時を過ごしているように見受けられるのだろうか？この問いを自分に向けてみると、心の深い所で「それは違う」という叫びが上ってくるのを私は感じる。

IV. おわりに

この小論では、私は日々の生活を取りまく「時間」についての若干の考察と、限られた個人的な体験を通してではあるが、「いのちのとき」について感じたことを述べた。私たちは日々の生活の中でこれら二つのどちらも体験しているが、「時間」が時計の文字盤や数字で表されるのに対し、「いのちのとき」は感じられるものであるということが出来るかもしれない。それはあたかも私たちが生まれたときから体験している「いのちのとき」を潜在意識の中にうめこみ、その上に「区切られた時間」というモザイクブロックをはめ込んでしまった状態のようなものであろう。共同生活や労働のための「区切られた時間」のモザイクブロックの下を、柔らかいさらさらした砂地のような「いのちのとき」が、人の生から死まで脈々と支えているのではないだろうか。私たちは自分の深いところに埋め込まれている「いのちのとき」のことには殆ど気づかないで、あるいは無視して固いきちりとしたブロックの上を歩いているように思う。

終わりにあたって、「いのちのとき」について、いくつかのことを述べてまとめたい。まず、「いのちのとき」と区切られた「時間」は連続するものではなく、むしろ、まったく別の次元のものではないだろうかということである。それは、先に述べた「砂」と「ブロック」にたとえられることから推察される。だから、この二つのもののあいだを行き来するのは、時として努力と「しんどさ」を感じさせることにもなるのであろう。第2に、時間については私たちが「時間を持つ」とか「時間を作る」等の表現で示すように、「持つことができるもの」、したがって、時間を持っていることは良いこと、時間がないのは望ましくないこと（良い、望ましくないの基準はかなり主観的なものではあるが）として扱うのに対し、「いのちのとき」は自分がその中に身を置くことによって感じるものであるということがある。これは、フロムが「時間について考えてみると「持つこと」は過去、現在、未来の時間を支配していることであり、「在る」ことは時を超越し、今ここ、永遠に生きることにほかならない。（フロム『生きるということ』—「生きがい」とは何かp.79）」と言った

ことにつながるのではないだろうか。「いのちのとき」にあっては、過去・現在・未来を識別することなく、それらを超越し、今ここ、永遠に生きることを意味する。このように、「今ここ」に生きることに集中することは「いのちのとき」についていえる第3のことである。

振り返ってみると、私たち一人一人はみな赤ん坊であったときには、時間という意識はなく、「いのちのとき」を生きていたのであり、年老いて雑念から解放され、人生の終りが視野に入ってくると、きっと「いのちのとき」を感じることが多くなるであろう。しかし、細かく区切られた自分の時間や他者の時間を出来るだけ無駄なく使おうと神経を使う中であって追われるような生活しているときも、自分の中に流れる「いのちのとき」と、それから連なる「永遠のとき」を機会があるごとに感じながら生きていきたいと願っている。

参考文献

- エンデ、ミヒャエル著（大島かおり訳）モモ 岩波書店 1976年
イリイチ, I. 著（玉野井芳郎・栗原彬訳）シャドウ・ワーク
—よりよい生活の質をもとめて— 岩波現代選書 1982年
イリイチ, I. 著（玉野井芳郎・栗原彬訳）ジェンダー
—女と男の世界— 岩波現代選書 1984年
柏木恵子著 幼児期における「自己」の発達—行動の自己制御機能を中心に—
東京大学出版会 1988年
江原由美子他編著 ジェンダーの社会学 —女たち／男たちの世界—
新曜社 1989年
小林司著 「生きがい」とは何か —自己実現へのみち—
NHKブックス579 1989年
ハムトン、P. G. 著（渡部昇一・下谷和幸訳）知的生活
原著者の初版は1873年マクミラン社から出版
講談社学術文庫 1991年
野口悠紀雄著 続「超」整理法・時間編
—タイム・マネジメントの新技法— 中公新書 1995年